

ずいそう

長く楽しんできた将棋のこと

熊谷政行



皆さんにもそれぞれ長く続けている趣味があると思いますが、私のそれは将棋です。子供の頃に始めてから今まで、いろいろな場所と方法で楽しんできました。そんな私と将棋の関わりについて書かせて頂きます。

私が子供の頃は身近に将棋の駒があって、「回り将棋」や「やま崩し」などで遊んでいました。指し将棋を覚えたのは少し遅く、小学校高学年ころでした。

遊びの一つだった将棋に本格的にのめり込んだのは中学生の時です。将棋友達に誘われて地元の小さな大会の初級クラスに出場したところ思いがけず準優勝。嬉しかった半面、一緒に参加した友達が優勝した悔しさから、もっと強くなりたいと思ってからでした。

それまでは将棋の勉強などしてこなかったのですが、隣町の本屋に行って初級向けの本を買い、(私の住んでいた田舎町には本屋がなかった)難解な内容に四苦八苦しながらも読みふけりました。後で分かったのは、その本は初級者に全く優しい本で、もう少し良い本に最初に出会えていたら、もっと上達していたかもしれません。

こうしてライバルに勝ったり負けたりしながら、ますます好きになりました。それが高校生になると部活や勉強が忙しくなって将棋を指せる機会が減ってしまい、指したいという気持ちだけが強くなって悶々としていました。

思う存分将棋が指せるようになったのは大学生になってから。入学してすぐに、将棋部を探して即入部。私が入部した岩手大学将棋部は前年にできたばかりの同好会扱いでしたが、部員は皆、私より強くて初めは負けてばかりでした。それでも、いつでも指せることがうれしくて、誰よりも早く行って、盤や駒を用意して他の部員が来るのを待っていたものでした。

話はそれますが、私は大学4年間を学生寮で過ごしました。昭和の学生寮で、今では絶滅したような伝統やしきたりで大変なことも多かったのですが、将棋を通じて親しくなった先輩には、いろいろ良くしていただきました。

大学将棋で最も重要な大会が春と秋に行われる地区

学生将棋大会です。中でも各校が力を入れていたのが団体戦。6～10校が参加して、1チーム7名でリーグ戦を戦うもので、優勝校は全国大会に出場できました。当時、東北地区では東北大、東北学院大、弘前大の3強が代わる代わる優勝していて、3強に割って入るのが我が校の目標でした。

団体戦は長机を挟んで両校が向かい合って対局して、対局が終わった順に席を立っていきます。チームの勝敗を左右する対局者の周りには両校の対局を終えたメンバーが集まって固唾を飲んで見守っていて、勝敗が決まった瞬間に「お～」とか「あ～あ」とか歓声と溜息が入り混じるのが団体戦って感じで好きでした。

大会のもう一つの楽しみは、参加校の多くが期間中、同じ場所で寝泊まりすること。地元の東北大学の学生寮の広間を借りて雑魚寝するのが恒例で、寝転がりながら他校の選手と雑談をしたり、対局したりと交流できました。ここで仲良くなった山形大学とは合同合宿として一緒に旅行に行ったのも良い思い出です。

肝心の大会の成績は、最初の3年間は下位から抜け出せませんでした。4年次の春に初めて上位校2校を破り、最後の大会の秋は優勝校と1勝差の3位になりました。優勝の夢は約20年後の後輩が達成してくれました。

将棋には町道場での楽しみもあります。道場というところ、煙モクモクでオジサンばかりをイメージすると思いますが、実際は禁煙席があり女性や子供もいました。色々な方がいるので、初めて指す方は皆強そうに見えて緊張感をもって指すことができます。

私が初めて道場に通ったのは大学時代、盛岡の道場でした。そこでは月1回、月例会という大会がありました。千円の参加料で5回戦の変則リーグ戦を戦い、全勝すると扇子などの将棋グッズ、3勝でも映画観賞券などがもらえました。勝つごとに次の相手は強くなるため、たまに4連勝できても最後は県代表級のラスボスに敗れてばかりでした。それでも3勝で貰える映画券はありがたく、映画は頂いた券だけで見ていました。賞品は早い者勝ちだったので終局が遅くなると、人気の映画券などは品切れで、残っていた成人映画の

券を仕方がないと言いながら頂いて帰って、しっかり観賞していました。

卒業前の最後の月例会でも4連勝の後5戦目に負けてしまったのですが、席主さんから卒業祝いとして扇子を頂きました。この時の扇子は今でも大切に持っています。席主さんには大変お世話になりました(写真-1)。

その後も、旭川、札幌、東京、網走、稚内など転勤の度に様々な道場に行きました。

道場では各種団体が主催する大会が開かれることがあり、中には全国大会の地区予選を兼ねているものもあります。社会人になってからは、こんな大会が目標でした。

地域の猛者が集まる大会では、勝ち上がるのは大変で、1、2回戦での敗退が多かったのですが、稀にゾーンに入ったように勝てることがあって、全道将棋選手権の旭川地区代表になれたことと、網走の支部名人戦で優勝したことが私のちょっとした自慢です。

それぞれの道場や大会を通じて知り合った方々の活躍を新聞やネット記事で見かけると今でも嬉しくなります。

子供が出来て道場に出かけることが難しくなってきた頃に始めたのがネット将棋でした。私が始めた頃は、インターネットはまだ普及しておらず、パソコン通信と言われる電話回線を使うものでした。接続している時間分電話代がかかるため、最初は月に数万円の請求が届いてしまい、妻からは怪しい事に使っているのではと疑われたりしました。通信環境も悪くて、対局途中で頻繁に接続が切れ、とても集中して指せる環境ではありませんでした。

その後、インターネット時代になると回線が安定し、料金も格段に安くなって安心して対局できるようになりました。利用していた将棋サイトの会員数もあっと

いう間に数万人に増えて、家にいながら全国の人といつでも指せるという、今では当たり前ながら当時としては夢のような環境ができました。

ネット将棋の対局や交流サイトを通じてネット上の将棋仲間も増え、棋譜をホームページで公開し合ったり、仲間内の大会を開いたり、仲間同士でチームを組んで団体戦に参加したりと、リアルとは違う新しい楽しみもできました。

長く続けている将棋ですが、還暦を過ぎた今では、衰えを自覚するようになりました。長時間対局する気力体力、定跡を憶える記憶力、先を正確に読む力、全てが年々衰えているのが分かります。あるプロ棋士は、強さのピークは30代と語っていましたが、30代の私と今の私と比べると2段分は力が落ちていると感じます。

とは言え、もう楽しめないかというそうではなくて、今も頑張っているのが詰将棋です。初めは読みのトレーニングで始めたものですが、難問を解けた時の爽快感から詰将棋自体を楽しむようになりました。いつでも、どこでもできる詰将棋は脳の老化防止にも最適で、詰将棋専門誌を定期購読して毎月解答を送っています(写真-2、3)。年間の解答ポイントに応じ

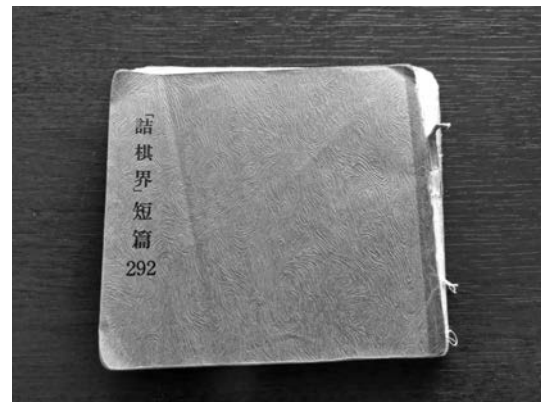


写真-2 40年解き続けてボロボロになった詰将棋本



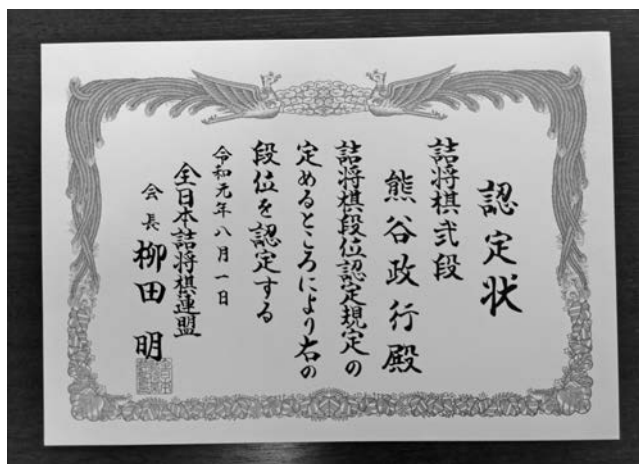
写真-1 大学卒業時に道場の席主から頂いた扇子と部員の寄せ書きの扇子



写真-3 毎月解答している詰将棋専門誌

て段級位の認定を受けることができ、数年前に詰将棋二段の認定を頂きました（写真—4）。次の三段の壁は高いですが、目標にして解答を続けています。

最近では藤井七冠の活躍もあって、いろいろなメディアで将棋が取り上げられるようになりました。ネット



写真—4 詰将棋二段の認定状

配信も増えて対局を見て楽しむ機会が格段に増えました。これまで特に推しの棋士はいなかったのですが、昨年、小山怜央さんが棋士編入試験を経て岩手県初のプロ棋士になりました。また、今年は札幌出身の齋藤優希さんが、年齢制限が迫るなか奨励会三段リーグを抜群の成績で勝ち抜けて今春のプロ入りを決めました。齋藤さんは小学生の頃に私の娘と机を並べた縁もあって、小さい頃からその活躍も苦労も見てきたので本当に嬉しかったです。彼らの今後の活躍は楽しみで、これからも注目して追いかけていきたいと思っています。

このように将棋をその時、その場所で、色々なやり方で楽しむことができました。その時々で、将棋を通じて多くの方と知り合うことができたのも大きな財産です。これからさらに年を重ねても、緩く長く楽しんでいきたいと思っています。

—くまがい まさゆき 野田建設工業(株) 取締役副社長—

